

# 上田宗箇流、広島茶道の流派

ジュラナ・ペテル

## 1. 始めに

茶道の上田宗箇流は広島の伝統的な文化の代表である。流派としては小規模であるが、発祥地の広島で忠実に流儀を伝承してきたのである。特徴として、武家茶、つまり武士に合わせた茶道で有名です。又、ボテボテ茶といって、塩の入ったお茶があるのが知られているようです。

茶の湯の一般の流儀・発想の発展をたどり、上田宗箇流が茶道界の中でどういう位置にあるかということを調べてみたい。そして、茶道の主流との比較によって、武家茶と上田宗箇流の特徴、後は現状について考えたい。

## 2.1 茶道の発展期における武家茶の登場

茶そのものは元々遣唐使と僧侶によって伝えられたものである。奈良時代頃には団茶が日本に入った。中国の宋朝、つまり日本の平安時代の頃になると、臨済宗の教えを中国で学んだ栄西禅師（1141 - 1215）によって抹茶が日本に紹介された。喫茶は先ず禅宗のお寺や禅宗と関係が深かった武家階級に普及し、そして室町時代の初期になってから一般にも流行した。庶民たちは街角で一服一銭の立ち売り茶を飲み、武家階級では闘茶又は茶寄合という派手な賭け事の遊技になったりもした。

茶の湯が確立されるようになったのは村田珠光（1422 - 1502）という大徳寺の禅僧が將軍足利義政の隠居した銀閣寺に召し出された時であった。珠光が仏法は茶の湯にもあると悟って、広間の書院ではなく四畳半の狭い茶室で、質素な台子の茶の湯を行った。珠光は茶の湯の開山と称されている。

村田珠光の弟子に茶を学んだ竹野紹鷗（たけのじょうおう）（1522 - 1591）がお茶を一層簡素なものに改めた。国焼きを使っており、草庵の茶室には囲炉裏を切り、「貧しきに満足して楽しむお茶」、いわゆる「侘び茶」（わび茶）を説いた。紹鷗によって茶の湯はますます精神的な深みを加えた。

茶祖と称されている千利休（1523 - 1591）によって茶の湯が完成された。自由都市の堺（さかい）に住んでおり、竹野紹鷗に師事し、織田信長と豊臣秀吉に召され茶頭（さどう）として仕えていた。侘び茶で和敬清寂の理想を説き、簡素な生活の中に敬虔（けいけん）な心を以て茶の湯を行うことを教えた。またその道具も改良したのである。中国渡来の物を国産の器物に代えて、日常の生活の物を利用するようにした。

千利休が秀吉の勘気を被って、切腹を命ぜられた後に、秀吉にお茶を指南したのは古田織部（ふるたおりべ）（1556 - 1615）であった。利休の弟子の中で一番偉く、個性に富んだ茶をしたと言われている。織部は実際に戦いに参加していた武人で、簡素な茶を続けており、道具、流儀は武士の好みに合わせた。「古田家譜」によると、利休の町人茶を武家茶に改めるように秀吉に命令されたという説もある。確実なのは、江戸時代の初期の天下統一の後に、武士達が文化的な面でも指導的立場になってから、大名茶・武家茶が普及していったということである。

利休が静中に美を求めたのに対して、織部は動中に美を求めたと言われている。織部の好みの道具は大胆で豪放な感がある。織部は徳川二代将軍秀忠にも茶の湯を伝授していた。大阪夏の陣の戦いでの大阪落城後に切腹を命ぜられた。古田織部が形成した武家茶を受け継いだのは小堀遠州、片桐石州、上田宗箇、本阿弥光悦などであった。

## 2.2 開祖上田宗箇の生涯

武家茶を守り継いでいる上田宗箇流の開祖の上田宗箇は桃山時代と江戸時代の初期の茶道、作園などに優れた武将であった。政治的不安定な時代の中で、武将で茶人を兼ね、武士に合わせたお茶を形成していた人の一人であった。

上田宗箇は現在の名古屋市南区の尾張の星崎（おわりのほしざき）に1563年に生まれた。

10歳の時に父を失い、しばらく禅寺に預けられた。丹羽長秀（にわながひで）の侍児となり、丹羽長秀が安土城の総奉行（そうぶぎょう）に命ぜられ、宗箇もそれに従った。16歳の時既に参戦し負傷した。1583年に織田信長を倒した明智光秀（あけちみつひで）に味方をせんとする織田信澄（おだのぶます）の首を討って、勇名をはせた。多くの戦いに参加し、豊臣秀吉に側近く仕えるようになって、今の福井県に一万石（\*）を領した。小田原の戦後、秀吉の媒酌（ばいしゃく）によって嫁をめとったようである。

1590年11月6日、利休の切腹の三ヶ月前、利休の朝の茶会の三人の客の中に上田宗箇が招かれた。直接に利休にお茶を師事したことがあると見なされているけれど、長い間ではなかったのだろう。宗箇は1595年に伏見に侍衛（じえい）され、そこで住んでいた古田織部、小堀遠州など、その時代の偉大な茶人たちとお茶をめぐって交流した。いろいろな際に行われた茶会の会記には宗箇の名前が記録され、古田織部からが宗箇に贈った「生爪」という伊賀花入の添状などがその交流を示唆している。

1599年に参禅していた大徳寺の三玄院の開祖の百十一世春屋宗園和尚より法諱「宗箇」、道称「竹隠」を授かった。

関ヶ原の戦では敗北した西軍の側で戦った。その結果、領地を没収されて、剃髪した。三年間をかけて、現代の徳島県で蜂須賀家政に仕え、結局は関ヶ原の戦で紀州（現在の和歌山県）を与えられた浅野家の家老の役を務めるようになった。1615年に榊原の戦で

はまた勇名をはせた。浅野長晟（あさのながあきら）が芸州（現在の広島県）に入ったのに従って、宗箇が広島に移り、広島県の東にある佐伯郡（さいきぐん）で2万7千石の土地を領することになる。所領の浅原では一時隠棲した。国老として務めたり、茶人として生活を送ったりしていた。最期には二十日間、食を絶って、88歳で亡くなった。

（＊一石の領はお米の1万8千リットルができるほどの面積の土地

#### 2.2.1 上田宗箇の作園：

—縮景園、（広島市）もともと泉水館という、中国の西湖（せいこ）を縮景したと言われて、浅野家の別邸として1619年に宗箇によって作られた園庭

—和歌山城西之丸庭園（和歌山市）

—名古屋城二之丸庭園（名古屋市）

—千秋閣（せんしゅうかく）庭園（徳島市城内）

—粉河寺（こかわでら）庭園（和歌山県那賀郡粉河町）

—紀州和風堂—茶寮（和歌山県）1614年（借景の紀州宗箇松）

—二代目、芸州和風堂（広島城内）1619年

（明治時代に練兵場となって、取り壊されたが、1982年には復元された）

—芸州宗箇松 広島市の宗箇山の山頂に、和風堂から見た借景として、宗箇が植えた赤松

#### 2.3 上田宗箇流茶道の独特な伝承方法

以降、上田家は代々一万七千石を領し、広島藩の国老職を務めていたため、茶を直接に人に教えるなどのことをしなかった。今日まで宗箇の茶が守り伝えてきたのは茶事預かり師範達であった。野村休夢という人が宗箇に茶を学んで、そして剃髪し、百石を給せられて、上田家茶道の役を務めた。彼の弟子、中村知元が同じく百石を与えられて、二代茶事預かり師範となった。以降、その二つの家は交替で茶道の役にあって、宗箇の茶を忠実に後世に伝えた。

16代と17代の預かり師範は嗣がなく、中村・野村家以外の人が茶道の役を務めてから、結局1955年に上田流茶預かり師範の制度は終わった。

#### 2.4 茶道流派の系統の中の上田宗箇流

現代でも存在しているさまざまな茶道の流派を大きく分けて、一番代表的な流派をあげ、それらの中の上田宗箇流はどのような位置にあるかを指摘してみる。

##### 1. 千家系の流派

千利休の養嗣子であった少庵という次男の長男、つまり利休の孫、宗旦から、三千家に分かれた。長男を勘当してしまって、次男の宗守から武者小路千家（官休庵）、三男の宗

左から表千家（不審庵） 四男の宗室から裏千家（今日庵〔こんにちあん〕）が始まった。

その他、千家系としてとらえている流派は：

—千家から分裂した流派（速水流、川上不白の不白流＝江戸千家）

—利休の七哲が開いた流派（有楽流、細川三斎流）

—利休の他の弟子が開いた流派（南坊派、隈本古流、久田流）

—宗旦の四天王が開いた流派（山田宗偏の宗偏流、松尾流）

## 2. 大名・武家茶系の流派：

利休の高弟の古田織部が武家茶を形成した。織部自身の流派は残されていないけれども、古田織部に茶を学んだ弟子たちは武家茶を伝承している。なお、織部流と別々に発展してきた流派もある。

—織部の弟子が開いた流派（小堀遠州の遠州流、上田宗箇流、本阿弥光悦）

—利休の長男道庵の影響を受けた流派（金森可重の宗和流、片桐石州の石州流、松平不昧の不昧流）

—千家の影響を受けた武家茶の流派（藪内流（やぶのうち）三千家を上流、藪内流は下流という）

石州流はまた多数の流派に分かれている（宗源流、怡溪流、江戸怡溪流、伊佐流、大口流など）江戸時代で一番勢力があったのは大名・武家茶の遠州流と石州流であった。明治に入ると、社会の民衆化と共に、町人茶として形成され、庶民の間で人気があった三千家のお茶の方が普及し始めた。上田宗箇流は発祥地となっている広島では強い地位を維持してきた。但し、流儀がそれぞれ違うといっても、お客を心からもてなすことが共通点で、流派の所属より遙かに重要だと見なされている。

## 3. 上田宗箇流の作法・流儀

### 3.1 一般的な茶の湯のお点前

上田宗箇と裏千家の具体的な比較に入る前に、茶道の術語と茶道の作法の一般的な流れをあげてみたい。

茶道の道具の名前・術語（括弧では普通に使う材料）

茶碗（陶器）

茶筌 茶碗で湯をそそがれた抹茶をかき回し、泡を点てる道具（竹）

茶杓	茶をすくう、小さい細長いさじ（竹、まれに木、昔は象牙）
柄杓	湯や水をすくうための道具（竹）
棗（ナツメ）	薄茶のための抹茶を入れておく入れ物（塗った木）
茶入れ	濃茶のための抹茶を入れておく入れ物（陶器）
茶巾	茶碗を拭くための麻の布
帛紗（フクサ）	道具を清めるなどのための絹で作った正方形の小さい布
釜	（鉄）
水差	水を入れる入れ物（陶器、磁器、まれにガラス）
建水	汚れた水を捨てる容器（金属、木、陶器）
薄茶点前	一客一碗をすすめる。泡がたつように点てる。比較的に薄い味わい、茶事では濃茶を飲んだ後に楽な気持ちで行う濃茶点前ゆっくりで厳か。練った茶を一つの碗でお客様全員がのみ回す。 薄茶と比べれば作法が複雑で、抹茶の種類も違う

一般の薄茶点前の流れ：（棚なしの平点前（ひらでまえ））

亭主が茶室にいるお客に挨拶し、まだ置いてない道具を持って入る。決まった場所にそれぞれの道具を置く。帛紗で茶杓と棗を清める。湯を入れた茶碗を暖めながら茶筴を調べて、お湯を建水に捨て、茶碗を茶巾で拭く。茶を入れて、茶筴で点てる。お客が皆茶を飲んでからおしまいとしてそれぞれの道具をきれいにして、茶杓と棗を客に見られるように飾っておく。道具を持って帰り、お客と挨拶する。

### 3.2 流儀の相違

茶会の本当の目的は主人と客によって楽しい心洗われる一刻を過ごすものだとなると、上記のお点前を通してこそ、それが目指されている。そうすると、すべての流派では一般的なお茶の流れが変わらないはずである。しかしそれぞれの流儀は開祖の教え・伝統などに基づいており、経緯では作法には違いがかなり多い。細かい道具の扱い方や持ち方・置く場所などの相違もあるし、作法の一部が全く違うこともある。また、あるお点前に置かれている根拠、強調しているところなどが違うこともある。今の茶の湯の主なる流派の三千家は茶道の創設者の千利休の教えに基づいている。町人達の茶として形成されたため、平等・調和という発想が大事である。実際に戦争でしばしば戦っていた武将達によって作られた武家茶の場合では厳粛・秩序などの方が重視されている。武家茶の上田宗箇流のお点前の特徴やその特徴の解釈について考えてみたい。

### 3.3 上田宗箇流と主流である裏千家との作法の比較

茶会・茶事ではよく言い回しの決まっていることがある。

雑談は望ましくないが、一般的に茶の湯のことやある茶会のテーマをめぐって自由に話せる時もある。また、内容だけが決まっていて、自分で選んだ言葉遣いで言えることもある。決まり文句もあるが、必ずしも決まった一つの文句を言わなければならないわけでもない。その時言うべき気持ちを表しているとしたら、相応しい挨拶の選択も可能である。すなわち、自分勝手な話題を話さずに、相手の心を思い遣り考えて、ものを言うのが目的である。

表は裏千家と上田宗箇流の薄茶点前の基本的な挨拶の言い回しである。

使う時	裏千家	上田宗箇流
最初の挨拶、襖を開けた時	一服差し上げます	一服差し上げます
初めて柄杓を構えて、蓋置きに置いてから	—なし—	どうぞご楽に
客が茶をいただく時言う言葉	お点前頂戴致します	頂戴致します
客が飲んでから亭主が茶碗を手前に返す時	—なし—	お飲みにくうございました
客全員が飲んだ後	お仕舞い致します	一応仕舞わせて頂きます
終わってから、客が道具を見せてもらうように頼む時	御棗、お茶杓の拝見を	御両器拝見
出る時障子を閉める前に亭主が言う挨拶	失礼致しました	お目だるございました

注 ア 最初の挨拶として、裏千家のお点前では総礼だけを（お辞儀）することが多い上田宗箇流の最初の挨拶として一服差し上げますとも言うことがある

イ 亭主がお茶碗を返してもらった時、裏千家の濃茶点前では総礼をする又、裏千家の濃い茶では柄杓を構えて置いてから全員が総礼

エ 拝見を頼んでいる道具は適当にお点前によって変わる

裏千家の挨拶の場合では現代の敬語が使われているに対して、上田宗箇流では古い敬語の言葉遣いもある。比較してみると、上田宗箇流の方がもっと形式的な感じがしている。裏千家の挨拶はより和を目指している丁寧さがあり、上田宗箇流にも同じようにあるといっても、ある程度の秩序や厳しさが見える。

#### 3.3.1 上田宗箇流と裏千家の点前の比較

茶の湯には非対称が多い。と言うよりも、対称がめったにない。理想は非対称によって、バランスを取ることである。模様・色・大きさの似ている道具は普通同時には使わない。でも裏千家のお点前では畳の線に道具が揃えてある。上田宗箇流では殆どの道具を少し斜めに置いている。

主な道具の置き方は七歪（ななひずみ）と呼ばれている：

- 1，小板が少しお点前の方に歪む
- 2，風炉が少し勝手の方に歪む
- 3，五徳は前を少し高く据える
- 4，前土器を少し向こうに伏せて置く
- 5，釜の前を少し高く置く
- 6，柄杓の柄をお点前の方へ斜めに引く
- 7，居住まいは風炉の方へ少し斜めに坐る

/上田宗箇流（上）と裏千家（裏）の対照

1. 上 「乗馬柄杓」― 男性は建水に入れておいている蓋置と柄杓を持って入る時、建水が左手に下がっていて、柄杓は延ばしている右手で持つ。乗馬の手綱を持っているような形となっている  
裏 建水の上に柄杓を伏せて、左手で持って入る
2. 上 棗と茶碗は両手でそれぞれに近く、同じ高さで持つて行く。  
裏 棗と茶碗はもう少し離し、お茶が入っているため棗の方を少し高い位置で持つて行く。
3. 柄杓の扱い方はかなり違う。水を注ぐ前、柄杓を置く前などの扱い方は、上田宗箇流ではまっすぐな動きが多い。裏千家では弧を描くような動きが多い。湯や水を注いだ後、釜に柄杓を伏せる方法が異なっており、それらは上田宗箇流の方が簡単そうである。
4. 上 釜の蓋を開けると、先ずはしっかり閉めて、蓋の手前を持ち上げて、それから取る  
裏 蓋を少し自分の方へあげて、滴をおろして、取る
5. 帛紗さばき  
上 帛紗は右側に腰につけてある。取る時は女性が両手をつかって、持ち替えて、縦二折りに折って、横はほぼ半分に折る。男性は帛紗を取るのに右手しか使わない。  
裏 帛紗は左側に腰につけてある。男性も女性も同じく左手で出して、両手で扱って縦三折りに折り、横はほぼ半分に折る。
6. 上 帛紗をさばいた後、棗を清めるのに、まっすぐした、速い動きで拭く。茶杓を清めてから帛紗の中に握って、手前から向こうへ少しずつ出して、最期に棗の上に載せる。  
裏 棗を清めるのに丸くて、優しい感じの動きで拭く。茶杓を拭いてから、帛紗に

乗せずに、直接棗に置く。

7. 裏千家で「茶筌通し」、上田宗箇流で「茶筌湯治」という使う前の茶筌の清め方・調べ方にはかなり多くの違いがある。

裏 茶筌を茶碗に入れ、20センチの高さぐらいまで回しながら行う。そして、お茶を点てるようにかき回してから引き出す。

上 複雑に回したり、置いたり、握り込んだりするやり方がある。そして、後は穂調べをする。

8. 上 水を捨てる前に、茶碗を両手で持ち上げて、揺らしながら三回回す

上田宗箇流では男性の茶巾の折り方が違うと同時に、拭き方もかなり異なっている。男性が茶巾を使った後はまたたたみ替えて、もとの場所の蓋置きの上に置く。

10. 上 茶をすくう時は棗の蓋を茶碗の手前に置く。すくう直前左手で棗、右手で茶杓を持ったまま、同時にまっすぐした動きをする。すくった茶を二回さばく。

裏 棗の蓋は右手前に置く。入れた茶はさばかない

11. 上 茶筌を茶碗に入れてから「の」の字を描く。茶は点前から向こうの方向に少しきれぎれする感じの動きで点てる。茶筌を取り出す前にまた「の」の字を描く。

裏 茶筌を入れてからすぐ点てる。前後の動きで完全に細かい泡ができるまで点てる。茶筌を引き出す前に「の」の字を描く。

12. 上 茶碗に入れた水を建水に捨てる前に濯ぐように両手で持ち、三回揺らしながら回す

13. 茶碗を濯いだ後の茶筌通し・茶筌湯治はまたかなり違っている。

上 茶筌湯治してから茶筌を建水の上に二回振る。茶筌を茶碗にのせる前に膝の上で右の方に回して、入れる「名残茶筌」

### 3.3.2 相違の解釈

さらに道具の持ち方・取り方・置き方・間隔などの小さな相違も多い。

茶室での歩き方・障子の開け方も違う。

上田宗箇流では、動作をもっと規制するように、動きはある程度きれぎれしているような感じがする。滑らかで自然に行われた動きではなく、直線をたどって、途中で止まったりする動きの方が多い。但し、直線をたどるといっても、直角をたどって動くことはない。直線はまっすぐ行って、角は弧を描く。手の動きは同時にしない。一般のルールは片手である茶器を持って、その手の側の膝を体と水平止めて、もう片方の手で他の茶器を取り、また膝の上に止める。そして最初にとった茶器を置くまたは使う。最後に二番目として取



った茶器を使う。

客に関する点で一番違っている所はお辞儀の仕方以外に、菓子を食べる時に使う紙である。男女の大きさが異なる一般の茶道の懐紙を使わないで、上田宗箇流ではお菓子を食べるのに四つに折った書道の半紙が使われている。お菓子を紙で持ちながら食べる。点前に使う道具なら、茶道の主派と同じ道具が多い。

### 3.4. 道具

一般的に言うと、武家茶の特徴で、上田宗箇流の道具は簡素である。自然なままの感じで飾り気がない。例をあげてみると、棚の場合は塗った棚を使うことは珍しくて、普段は木地を使う。

道具の典型的な例は開祖の上田宗箇作の道具である。道具の名前と評価：

竹：一重切り花入（たけいちじゅうきりはないれ）—たくましくて、激しい気迫が満ちている茶入れ

「さても」という茶碗 力強く堂々たる姿をし、豪快な茶碗

「敵がくれ」という二本の茶杓 樫井の戦の最中で作られたと言われている。直線的な感じの茶杓

茶入：気力みなぎる作の茶入

「門無俗士駕」（モンニゾクシカゴナシ）と読む行書の掛け軸 我が住まいに俗人をお迎えしないという意である。武士の道徳が見える。字には豪放さがあると見なされている。

先に述べた道具は全部上田宗箇流の茶の代表として、その茶の本質をもよく表している。研究するにあたってお世話になった東広島の景山宗貴先生のお稽古では、遅しくて、質素な水差があった。由緒を伺ってみると、南蛮焼き（なんぼくやき）の一つで、凡そ400年前に日本に来た外国人が持って来た物だと先生はおっしゃった。同じく、先生のお稽古で出てきた少し古そうな感じのお盆の由来を聞いてみると、上田宗箇自身が使い、浅原の隠棲の時に村人に与えた物だと教えて頂いた。上田宗箇流では、こういう貴重品が普段の稽古でも使われているようである。つまり、どこかに飾ってあるよりも、何かの役に立てるということで、道具の意味・価値が一層あがっていくということであろう。

### 3.5 上田宗箇流の男性の点前と女性の点前の対照

#### 1. 座り方、お辞儀

男性は膝の間に握りこぶしが2つ入るように正座で坐る。女性の場合は1つ分である。お辞儀をするときは：

- 男性は掌を畳につけないようにするために指を握り込み、親指の先を人差指の内側につけて挨拶する。つまり、人差指、中指、薬指、小指の第二関節の外側が畳につくことになる。
- 女性は指を伸ばしたまま両膝前で指先だけを畳につく。男女の角度は同じで、約60度である。

## 2. 立ったり、坐ったりする方法：

男性の場合では即座即立というのがある。女性の場合では立ってから歩き出す前に着物の下を治すためのような動きで後ろの方へ少し踏む。

## 3. 道具の扱い方

先述したように、初めに男性は蓋置が入れておいている建水を左手で、柄杓を伸ばした右手で持って茶室に入る。女性は柄杓を建水の上に伏せて、全部右手で持って入る。

水をすくうため柄杓を取るとき、右手の指をにぎり込んだようなままで柄杓を取る。そうすると、丁度弓を引くような形になる。

## 4. 帛紗

男女とも、右の腰に帛紗がつけてある。取る時は女性が右手で帛紗を取って、左手を使って、右の膝の上にさばく。男性の場合は帛紗を右手で腰から引いて、右膝の上に置いて、右手で二つに折って、更に右手で左膝の上に移してからさばく。点前中、帛紗のさばき方、折り方はいくつもあるのだけれども、男性の点前では片手だけを使う傾向がある。

## 5. 茶巾のたたみ方

女性の点前では、茶碗を拭くのに、茶巾が縦三つに折り、横四つに折って、長方形の形になる。

男性の点前では、三つと四つに折るたたみ方は変わらないけれども、長方形ではなくて、甲の形で、台形となる。

一般的に言うと、上田宗箇流の女性の点前は主流の三千家の点前に近い。だから、男女の相違は武家茶の特徴がよく指摘できる場所である。

### 3.6 武士点前

堺の町人茶から武家茶が形成されたのは16世紀の終わりごろであった。自治都市の堺ではなく、実際に戦いに参加していた武士達、古田織部・上田宗箇などによって生み出されたものである。そのため自由都市の堺の茶と比べれば、武士らしい秩序を大事にしており、厳粛・簡素な感じする。

上田宗箇流の点前を見ると、一見で厳しく難しいことに気がつく。その理由の一つは、宗箇の茶は武士になる青年を育てる機能もあったからだ。茶を通して、対人関係のこと・美的感覚だけでなく、武士道の道徳も伝える機能があった。

武士たちは、徳川幕府に入ると、土農工商の身分制度上の一番上の階級になった。すなわち刀をさす権利を持っていた階級であった。武士道が茶室にも反映されたことに従い、独特な武士点前が発生してきた。刀が腰に付けてある武士の姿に作法が合わせられた。そのため、男女の点前には違いがある。

三千家の点前では作法の大部分は左手で、左膝の上で行われる。しかし武士にとっては左側に刀があるため、その動作の中心は右の方へ移されている。そのため、帛紗は男女とも右側の帯につける。男性だけは刀を持てるように、右手を使わずに、帛紗は右手だけで取り、片手で膝に置いたまま扱う。

男性の即座即立の座り方も武士の跡がある。つまり、落ち着いて茶を点てているとしても、戦う用意が常にできているはずであった。だから、立ち方も直ちに立ち上がることができるように合わせている。

しかし実際、茶室には丸腰なまましか入れなかったのである。利休が始めた茶の湯の改革では躡り口（にじりぐち）と刀掛というのが挿入された。客は茶室に入る前に、刀を刀掛に置かなければならなかった。それに、入り口はひざまずいて入らないといけない程低くなった。その理由は、俗世と茶室の世界の境界をもっと強調することであった。なお、入る前に客は頭を下げる状態になった。そうすると、身分にこだわらず、人間的なレベルで自由に交わることができたのである。こういう風に限られた自由の中では「亭主と客はお互いに最大の敬意を払う」ことができる。

上田宗箇流では躡り口も、刀掛もある。そうすることにより、茶室が俗世の戦乱から離れており、武士の心を浄化させ、精神を鍛えることができるようになっていた。

他の武士点前の特徴もある。前述の乗馬柄杓、弓の柄杓、甲形の茶巾などである。それぞれの場合、実用性ではなく、武士の世界の美を比喻の形で茶の湯に反映したのである。

#### 4. 上田宗箇流の現状

広島県の歴史、文化と上田宗箇流は強く結びついている。宗箇の活動や上田家が広島藩の国老職を務めていたことがその結果をもたらしたのである。県内中に、上田家ゆかりの地が多くある。二代目和風堂があった広島城、宗箇が作園した縮景園、1982年に復元された三代目和風堂、十五代宗源家元が宮司として務めていた饒津神社、宗箇が隠棲していた広島県の西側の佐伯町（さいきちょう）の浅原の岩船の水などがある。

100ぶりに1982年に復元された和風堂は上田流の本部で、家元の住居となっている。和風堂は広島市西区にあって、中の屋敷で稽古が行われる。屋敷以外に、遠鐘とい

う茶室、腰掛待合などがある。

広島市内で稽古が行われているのは

—県内：東広島、大竹、呉、竹原、三原、福山、府中、三次（みよし）

—県外：山口、和歌山県、奈良県、大阪、京都、東京

—海外：ハノーバー、ドイツ。広島とハノーバーが姉妹都市となった際に、１９８８年に上田宗箇流が洗心亭という茶室を寄贈して、ドイツ人と日本人、二人の先生の指導のもとに稽古と茶会が行われる。

現在では上田宗嗣が１６代家元となっている。家号は和風堂である。１９９５年に１５代家元山水軒宗源（６０歳まで宗元）から家元を継承した。１９６８年に慶応義塾大学経済学部を卒業し、上田宗箇流の茶はもとより、日本・広島文化・一般的に茶道の分野で活動している。日本や海外で（中国の重慶応市とドイツのハノーバー市）茶道の建築の指導監修をした。

#### 4.1 上田宗箇流の行事： 毎年

１月１日 和風堂初釜                      １月第三日曜日 縮景園大福茶会  
４月１２日 国泰寺豊公祭      ５月１日 和風堂宗箇祭  
５月１日 （旧暦） 東京大徳寺三玄院宗箇際 （２００２年５月１９日）  
１１月 和風堂紅葉茶会      １２月１４日 国泰寺義士祭  
２００２年度の茶会      （縮景園）  
２月１０日 梅見茶会      ５月５日 茶摘茶会  
６月９日 田植茶会      ９月２１日 観月茶会  
１１月３日 菊見茶会 （余所）  
４月２８日 そごう茶会、 策伝会 （誓願寺）  
５月４日 フラワーフェスティバル茶会  
９月２２ 助け合い茶会 （そうご）  
１１月２３日 茶筥供養 （禅林寺）  
１２月８日 義士祭      （明星院）

#### 4.2 ボテボテ茶

特別な茶会がある。１１月３日、観菊茶会（菊見茶会）ではボテボテ茶という茶を飲む。その由来は、武家茶の松田不昧流の７代の殿様の時代まで遡る。その時代四国では飢饉があった。茶だけでなく、食べる物もなかった。その時、不昧流では、人々に質素な食べ物と茶木の花で作った茶を与えた。その記念に上田宗箇流にも抹茶でなく、煎じた茶の花に塩をかけ、ご飯、豆なども入れて、各客は自分で普段より少し長い茶筥で練るということをする。しかしこの、茶に塩をかけるというのは、年に一回だけのボテボテ茶の場合だけ

である。

#### 4.3 茶を三口でいただく訳

一口を飲んで三毒を潰し：

貪（ドン）むさぼり      嗔（ジン）いかり      痴（チ）まよい

二口を飲んで六根を制し：

目根、耳根、鼻根、舌根、心根、意根

三口を飲んだら茶の十徳により世に利す。

諸神加護、無病思災、朋友和合、遠魔天離、正心修心、睡眠除去、  
煩悩消滅、五臓調和、老養父母、臨終不乱

#### 5. 終わりに

上記の頂き方を影山宗貴先生に教えて頂いた。すなわち、お茶は心をきれいにすると共に、長生きの秘訣のようである。「お茶のおかげで、私は一番幸せな人です」と先生がおっしゃられた。心、体を鍛えるため、武家茶が厳粛であるとしても、茶会、稽古などには、ゆったりした雰囲気がある。比較的に小さい流派であることのおかげで、階級組織的ではなく、くつろげる雰囲気がある。350年前の上田宗箇の盆が日常的に稽古で使われていると分かった時は、感動した。大規模な茶道の流派と比べれば、茶道を学生と開祖や和風堂である本家との距離は短いという感じがする。

私自身は点前の印象という、裏千家では、和みのある優しい感じ、上田宗箇流の武士点前では、男らしく、少し厳しくて和みがあるという感じがする。

文化の継承という大きな視点から見れば、独特な伝統の伝承は非常に重要なことである。茶の場合は流儀の相違を弁えながら、お客を心からもてなすという各流派にある共通の目的を目指せばよいと思える。

#### 参考文献

- 茶道の歴史 / 桑田忠親、講談社 1979  
古田織部の茶道 / 桑田忠親、講談社 1990  
茶の本 / 岡倉天心著；浅野晃訳 講談社インターナショナル 1998  
茶の真諦：道・学・実 / 千宗室 淡交社 1980  
ひろしま文庫、茶道上田宗箇流 / 上田宗嗣、広学図書、2002  
上田宗箇流茶の湯 / 上田宗源 上田宗嗣、第一学習社 1993  
うつくしく宗箇の世界、中村本店 2001  
裏千家点前編、風炉、淡交社 1986